

学びの灯

ようこそ、広島都市学園大学 子ども教育学部へ

子ども教育学部には、様々な研究をされている先生方がいらっしゃいます。

このページでは、毎月、一人一人の先生方の思いや考え方などを記していただき、読んだ皆さんの心や頭に「学びの灯」をともします。

一つ一つの「灯」は、いくつか集まると、きっと大きな明るさとなり、皆さんの未来を明るく照らすものとなるでしょう。

また、ある「灯」は皆さんの拠り所となって、どんなときであっても、希望と温かさを保ち続けてくれるでしょう。

さらに、皆さんが「新しい灯」をともし、多くの人々の未来を明るく照らすことに役立つことでしょう。

さあ、今月は、どんな灯でしょうか？



新たな出発

子ども教育学部 学科長

古川 忠 則

私は担当する授業の中で、これまでの我が国の教育の歴史や営みに触れることがあります。例えば、我が国公教育制度の成立を促した「学制（明治5年、1872年）」には、「習熟度別編制」「二学期制」「飛び級」など今日につながる教育の制度も数多く規定されていましたし、学力観についても先人達の積み上げられた努力には大変参考になる事柄も多く、自ずと敬意を払うことも多々あります。

具体的には「日本教育学の祖」として貝原益軒の名言・格言などを紹介したり、福沢諭吉を近代日本を形成した教育家のひとりとして紹介したりしています。そして、この福沢諭吉翁の薫陶を受けた上山英一郎は慶應義塾に学び、後に害虫駆除に役立つ除虫菊から世界初の渦巻き型蚊取り線香を考案していますが、彼が初めて除虫菊を植えたのが広島県尾道市向島町であったことなどを紹介して、より身近な事象と関連付けて学生たちの興味関心に結び付けようとしています。

そのような中、過日、福沢諭吉翁の名前を改めて印象深く刻まれたことがあります。それは現在ベトナムのハノイ国家大学で講師を勤めているファム・ティ・トゥ・ザンさんという日本研究者を介してです。彼女は福沢諭吉の自伝である「福翁自伝」をベトナム語に翻訳し国内で評判を得たとのことですが、その動機が素晴らしいと思ったのです。

彼女は現状に焦りを感じ、目まぐるしく変化する社会、どうしたら良いのかわからない時代、何を学び何を教えたらいいのだろう、というような葛藤の中でたどり着いたのが福沢諭吉翁だったのだそうです。彼女は現在、ベトナムで日本文化や日本語を教えているそうですが、ザンさんの視点から福沢諭吉翁の教育論はどのように教えておられるのか、多いに興味をそそられるものです。

広島県でも長らく「ことばの教育」を推進してきていますが、改めてザンさんから日本語の特色について教えられました。何故かと言いますと、ザンさんは日本語の持つニュアンス等に興味関心を持たれ、日本語から直接にベトナム語に翻訳をしようとされたのだそうです。即ち、それまでは英語などを介して日本語本がベトナム語に訳されていたのだそうですが、それでは英語等が持つストレートさが前面に出て、日本語に込められている本来の良さ、独特なニュアンス等が大切にされないことがあるのだそうです。

初等教育段階では、とりわけ教師が言葉で説明し子ども達の理解を促すので、より一層「ことば」の大切さが重要となります。授業では「指導言」として教師の言葉の大切さを繰り返し強調していますが、ザンさんの指摘には教えられることが多くあります。

また、かつて、吉田松陰が松下村塾で安政3年7月からの2年5ヶ月で、高杉晋作、伊藤博文を始め数十人の若者の能力を開花させたそうですが、本学での教育期間はそれより長い4年間であります。彼の教育を称する次の表現が私の心に染み込んでいます。

「かれは火の玉が転げるようにして奔りまわった。その激しさゆえに、転がることを止められた。すると
こんどは、周辺の者・周りの者を焼きつくさずんばやまなかった。それが松下村塾におけるかれの教育であった。（出典：曾根信吾著『先人に学ぶ教育経営 教育人物読本 55頁』）」

私も日々の教育研究活動の中で、このような視点からの見直しが必要であると思っています。常に「新たな出発」を心がけ、学生達と「学び、教えることの喜び」を共有出来たら良いと考えています。